

選択集通津録講読

・著者…慧雲(1730-1782)深諦院

解題…本書は玄談に自叙する如く、安永己亥(師時に五十歳)の夏、通津専徳寺に講演せる筆録なり。通津の題名即ち茲に取るか。玄談の終わりに末疏を叙して西山派に八部、鎮西派に八部、今家に五部を掲ぐ。即ち是等の諸註を咀嚼し、正すに日溪(法霖(1693-1741))昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学を以ってす。特に玄談の一篇は文義優麗、他人の企及すべからざる特色を存す。

(メモ)

・安永己亥…安永八年(1779)。

※専徳寺住職は六世超応。天明二年(1782)に本堂上棟(超応75歳)

・末疏…西山派八部、鎮西派八部、真宗五部を「法霖(1693-1741)」と昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学で正す。

・底本…仏大

・参照…六条法光寺本(法本)(京都市下京区東松屋町840か)

選択集通津録卷四

九に四修章に三。初に標章。二に引文。三に私釈。今は初

念仏行者止修法之文

(【6】 念仏の行者四修の法を行用すべき文。)

今章の来意、上に准じて二義。もし文に約せば、『観経』六文中の第三なり。

問う。不審なり。四修の出、何の文に在るや。

答う。文は礼讃に出づ。義は三心を撰す。疏に「三心すでに具すれば、行として成ぜざるはなし」(註釈版七祖篇四七〇)と云う。

問う。もししからば何ぞ五念を欠くや。

答う。初後の二を挙げ撰して口一なるが故に(？)。また可し。対絶旨殊なるが故に。また可し。二行章中の義准じて知るべし。

もし義に約さば、承に近遠あり。その近き承とは、次上の三心。おのずから五念四修等の義を具するが故に、この章来る。五念を略さば次上の釈のごとし。その遠き承とは、第三章を承く。文に云わずか。念仏行者の行用の四修、すなわち助顕なり。

「四修章」とは、あるいは(決疑)「四修法篇」と云い、あるいは(大綱)「行用四修篇」と云い、あるいは(鶉木私集要義聞香)「四修章」と云う。今はまたこれに同じ。

二に引文に二。初に礼讃、二に要決。初の礼讃に二。初に標、二に釈。今は初。

善導往生止行四修法

(善導の『往生礼讃』にいはく、「また四修の法を勸行す。」)

「善導」とは、上のごとし。

「往生礼讃」とは、前序文なり。

「四修の法」とは、俱舍二十七に云く、

一に無余修。福德・智[477a]慧の資糧修して遣すことなきが故に。二には長時修。三大劫阿僧祇劫を経て、修して倦むことなきが故に。三には無間修。精勤勇猛にして刹那に廃することなきが故に。四には尊重修。所学を恭敬して情を顧みる所なく修して慢なきが故に。

(大正二九・一四一中) (参照 浄真全四・一二七二)

また撰論八に云く、「論に云う由は、無量無数百千俱胝大劫中、数々の修習に依る。釈に曰く、この文は三慧具と四種修を顕す。譬類をもつて知れ得るべからずを無量となす。数を知るべからずを無数となす。百億を一俱胝となす。一俱胝にあらざるが故に千と言う。また一千にあらざるが故に百と言う。歳数にあらざるが故に劫と言う。小数にあらざるが故に大と言う。これすなわち長時修と数修習を明かす。すなわち無間・恭敬・無余の三修を顕す。」と。

まさに知るべし、四修の大小通明なり。しかれば六要六(二)に俱舎の文を引き畢りて云く、

この論文、宗家の釈義と相違一にあらず。無余修とは、かしこは福智の資糧円満して遺余なき義に約す。これは一行余を雑することなき義に約す。長時修とは、かしこは三大阿僧祇劫長遠の義に約し、これは一生畢命の期に約す。何ぞ相違するか。

答、論説しかりといえども今の修行に就いて随義転用す。すなわち今の所引(十二紙右六行)「已勉と」等は、彼の論説を顧みて設くる所の釈なり。(乃至)「到彼」以下は論蔵等所説の四修、かの浄土において自然任運に具足する益を明かすなり。

(浄真全四・一二七二)

今按ずるに、一論意に依りて菩薩の所修おのずから三義に通ず。一は此土所修、二は彼土所修、三は本願所修。初の二義のごときはなおこれ通途。第三不共。六要の初釈は初の二義にあたる。もし第三に約せば、初の二所修、もと[477b]仏力所施回向に由が故に、利益天懸。偈に「不可思議兆載劫漸次成就五種門」(入出二門偈、浄真全二・三一六)と云うはこれなり。仏にあ

りては漸次、生にありては頓現なるが故に。知らず識らず帝の則に順じて隨義転用す。旨を得て領会す。

二に釈に二。初に徴問、二に別釈。今は初

何者為四

(何者をか四となす。)

徴問の所以は何。けだしその要領を示すのみ。

二に別釈に三。初に恭敬修、二に無余修、三に無間修。初の恭敬修に二。初に正しく恭敬を積す、二に兼ねて長時を積す。今は初。

一者恭敬止名恭敬修

(一には恭敬修。いはゆるかの仏および一切の聖衆等を恭敬礼拝す。ゆゑに恭敬修と名づく。)

恭敬とは、智論に云く、

謙遜畏難なるが故に恭と曰う。その智徳を推するが故に敬と曰う。

礼拝とは上のごとし(二行章)。まさに知るべし、次のごとき心身二業「彼仏」等とは、弥陀仏及び清浄衆を指す。

問。他と同異いかん。

答。他は生仏一如を談ず。今は信機信法。その異知るべし。

二に兼ねて長時を積す。

畢命為期止是長時修

(畢命を期となして誓ひて中止せざる、すなはちこれ長時修なり。)

文意解すべし。

問。他と同異いかん。

答。他は云く三大劫阿僧祇耶を経る。あるいは云く無量無数百千俱胝大劫等。今はすなわち畢命を期となして誓いて中止せずを云う。その異知るべし。

二に無余修に二。初に正しく無余を積す。二に兼ねて長時を積す。今は初。

二者無余_止名無余修

(二には無余修。いはゆるもつばらかの仏の名を称して専念し専想し、もつばらかの仏および一切の聖衆等を礼讃して、余業を雑へず。ゆゑに無余修と名づく。)

文意解すべし。

問。他と同異[478a]いかん。

答。他は福智無遺等を云う。今はすなわち専称彼仏(乃至)不雑余業を云う。その異天懸。子細会来、義はおのずから吻合す。次の上説のごとし。

二に兼ねて長時に積す

畢命為期_止是長時修

(畢命を期となして誓ひて中止せざる、すなはちこれ長時修なり。)

上に準じて解すべし。

三に無間修に二。初に正しく無間に積す。二に兼ねて長時に積す。初に正しく無間に積すに二。初に善に対して立つ。二に悪に対して立つ。今は初。

三者無間_止名無間修

(三には無間修。いはゆる相続して恭敬礼拝し、称名讚歎し、憶念觀察し、回向発願し、心々に相続して余業をもつて来し間へず。ゆゑに無間修と名づく。)

「相続」等とは、これまた二義。一は心相に約す。文に「不以余業来間」と云うが故に。

問。相続をもつて無間を積す。すなわち長時と何の別や。

答。長時は一期無退失辺を取り、無間は日日夜夜無間断辺を取る。所望異なり。

問。現前の吾人、無間あたわざるはいかん。

答。相は間にて体は常。法徳しからしむるなり。

二に悪に対して立つ

又不以貪_止名無間修

（また貪瞋煩惱をもつて来し間へず。犯せんに随ひ、随ひて懺せよ。念を隔て時を隔て日を隔てず。つねに清浄ならしめよ。また無間修と名づく。）

「貪」は順境に対す。

「瞋」は違境に対す。少を挙げて多を撰す。諸惑皆あり。

「随犯」等とは、法徳の薰ずる所、おのずからこの相あり。理実真心徹到す。三品と斉しい者なり。

問。他と同異いかん。

答。他は刹那を云う。刹那修を廃せざるが故に。今はすなわちしからず。たとい間に似たれども法徳は常なるが故に。

二に兼ねて長時に積す。

[478b] 畢命為期_止長時修

（畢命を期となして誓ひて中止せざる、すなはちこれ長時修なり」と。）

上に准じて解すべし。

二に要決に二。初は標、二は積。今は初。

西方要決^止以為正業

(『西方要決』にはく、「ただ四修を修してもつて正業となす。)

「西方要決」とは、上に已に解するがごとし。

二に釈に四。初に長時修、二に恭敬修、三に無間修、四に無余修。今は初。

一者長時修^止終無退轉

(一には長時修。初発心よりすなはち菩提に至るまで、つねに淨因をなしてつひに退轉なし。)

上に准じて解すべし。

二に恭敬修に二。初に標、二に釈。今は初。

二者恭敬修此復有五

(二には恭敬修。これにまた五あり。)

文のごとく解すべし。

二に釈に五。初に聖人を敬う。二に像教を敬う。三に知識を敬う。四に同伴を敬う。五に三宝を敬う。今は初。

一敬有縁^止向西方也

(一には有縁の聖人を敬ふ。いはく行住坐臥、西方を背かず、涕唾便痢、西方に向かはず。)

「有縁」等とは、意は弥陀を指す。

「行住」等とは、『礼讃』に云く、

面を西方に向かふる「を須るる」は最勝なり「と勧めたまふ」。樹の先より

傾けるは倒るるに、かならず曲れるに随ふがごとくなるがゆゑなり。かならず事の礙ありて西方に向かふに及ばずは、ただ西に向かふ想をなすもまた得たり。
(註釈版七祖篇六五八)

『浄土文(※龍舒浄土文)』五に云く、

後晋鳳翔僧志通、智者大師の浄土儀式を見て、欣抃に勝れず、西に向いて唾せず、西に背いて坐せず、専心修進す。後に白鶴・孔雀の行列を成して西下するを見、また現に(※原本…また)蓮華の光相の前に開合するを見る。通云く、「白鶴孔雀は浄土の境なり。蓮華の光相は託生の処なり(※原本…託して生ずる処なり)。浄土現る。すなわち起して仏を礼し、

[479a] 仏に対して終わる。火化の時、五色の祥雲火上を環覆す。

(大正四七・二六八中)

『浄土論』に云く、

たとへば、龍の行くに、雲すなはちこれに随ふがごとく、心もし西に逝けば、業またこれに随ふ。(大正四七・九一下)(註釈版七祖篇九七〇)

- 8 -

もし所求の勝境に向かずば、あに能求の妙行を起こさんや。故に必ず西に向く。

「涕唾」等とは、尊重の余相なり。『毘尼母論』に云く、

塔前、衆僧前、和尚阿闍梨前にて、張口して大涕唾を地に著すを得ず。もし涕唾を欲さば、まさに猥処を屏すべし。人の悪賤せしむることなれ。これ洩唾の法と名く。(大正二四・八三八中)

二に像経を敬う。

二敬有縁^止特生尊重

(二には有縁の像教を敬ふ。いはく西方の弥陀の像変を造る。広く作ること

あたはずは、ただ一仏二菩薩（阿弥陀仏・観音・勢至）を作ることまた得たり。教とは『弥陀経』等を五色の袋に盛れて、みづから読み他を教へよ。この経像を室のなかに安置して、六時に礼懺し、華香をもつて供養し、ことに尊重をなせ。）

「像」とは謂く仏像。

「教」とは謂く経教。

「変」とは謂く変相。

「等」とは大・観等の経を等しく取る。

「五色」等とは『薬師経』に云く、

もしこの経を誦持（※原本…受持）読誦し（乃至）五色の綵をもつて囊を作しこれを盛つて、浄処を掃灑し、高座を敷設して安処に用ふる。

（大正一四・四〇六中下）

今また准知す。

「六時」とは、夜三時昼三時なり。

「礼」とは謂く礼拝。

「懺」とは謂く懺悔。

「香」とは焼香、「華」とは散華。余文解すべし。

三に知識を敬う。

三敬有縁^止即除行障

（三には有縁の善知識を敬ふ。いはく浄土の教を宣ぶるものは、もしは千由旬・十由旬よりこのかた、ならびにすべからく敬重し親近し供養すべし。別学のものには総じて敬心を起せ。おのれと同ぜざるをば、ただ深く敬ふことを知れ。もし輕慢を生ぜば、罪を得ること窮まりなし。ゆゑにすべからくすべて敬ふべし。すなはち行障を除く。）

「知識」とは意は教授にあり。『止観』四の二（十二紙）に云く、

善知識とは、これ大因縁（乃至）知識に三種あり。一に外護、二に同行、三に教授。（大正四六・四三上）

「若干」等とは、大本に云く、たとひ大千【※世界】に満てらん火をも、【※また】ただちに過ぎて【479b】仏の名を聞く【※べし】。（※浄真全二・三一）等と。劫火なお過ぐ。いわんやその他をや。

「別学」等とは、よく別学をして謙虚崇重せしむ。

「与己不同」等とは、たとい別解なりとも、またただ恭敬す。

余文解すべし。

四に同伴を敬う。

四敬同縁^止深相保重

（四には同縁の伴を敬ふ。いはく同じく業を修するものなり。みづから障重くして独業成ぜずといへども、かならず良き朋によりてまさによく行をなせば、危きを扶け厄を救ふ。助力しあひ資けて、同伴の善縁深くあひ保重す。）

「伴」はすなわち同行知識なり。『般舟讚』に云く、

同行あひ親しみて願ひて退することなかれ（註釈版七祖篇・七三一）

『止観』四の二（十四紙）云く、

二に同行とは、隨自意及び安樂行を行ずるは、未だ必ずしも伴を須いず。方等般舟の行法、決して好伴を須う。更に相ひ策發し、不眠不散し、日にその新あり。切磋琢磨し、同心志を齊しくし、一船に乗ずるがごとし。互いにあひ敬重すること、現の世尊のごとし（※原本…世尊を視るがごとし）。これを同行と名く。（摩訶止観、大正四六・四三上）

「危きを扶け」等とは、『四分律』に云く、

要ず（※原本…必ず）七法を具すは方に親友と成る。一に作し難きを能

く作す。二に与え難きを能く与う。三に忍じ難きを能く忍ず。四に密事相い告ぐ。五に互相覆藏す。六に苦に遭えども捨てず。七に貧賤を軽んぜず。かくのごとき七法。人能く行ずるは、これ真（※原本…親）の善友。親しくこれに附すべし。（法苑珠林、大正五二・六六八下）

「危」とは謂く危急。

「厄」とは謂く厄難。これを扶けこれを救うはすなわち第六相。

「助力」等とは、またその余相。

「保」は謂く保護。

「重」は謂く崇重。余文は解すべし。

五に三宝を敬うに二。初に総標、二に別釈。今は初。

五敬三宝

（五には三宝を敬ふ。）

三宝に二あり。一は通途、二は不共。これ二にして二になし。通別互いに成す。もしそれ通途なるは、具さに義章十（初）の「帰三宝」、および十九（十三紙）の「三仏章雜章門」（初）の「三宝章」、「義林章」六（初）の三宝義林等の釈のごとし。

[480a] また不共に依らば、浄土の三宝は具さに五義あり。別相・一義・同体・三義・住持一義。如応知るべし。丁酉録のごとし。

二に別釈に二。初に且く二種を挙ぐ。二に更に住持を釈す。今は初。

同体別体止不果依修

（同体・別相ならびに深く敬ふべし。つぶさに録すことあたはず。浅き行者の依修することを果さざるためなり。）

「同体」とは、且く『義章』に依る。

略して三義あり。一に事について一を論ず。仏体の上について義に随い

三に分つ。覚照なる義辺を説いて仏宝となす。すなわちかの仏徳は軌すべき義ありを説いて法宝となす。違諍過尽を説いて僧宝となす。この三義の別徳。体は殊ならざるが故に一体と名く。(小大齊しきは偏に大いあらず)。

二に理(破相空理)につきてもつて論ず。三宝事別。体空殊ならず(これただ大あり。小は体空なし)。

三に実について一を論ず。三宝別といえども実性を一となす。もし涅槃につかば三宝すなわち一大涅槃(乃至)もし不二法門につかばもつて弁ず。三すなわち不二を名けて一体となす。これすなわち一切法界門中、随一みなしかり。(これただ大あり。小乗の中になし)。一体三宝これを弁じて略すのみ(以上通途。自下不共)。

(大乘義章、大正四四、六五七上中)

浄土三宝は一名号中に三義具足。光寿無量故を名けての「阿弥陀」故の仏なり。「除苦惱法」故の法なり。およびその「人民」故の僧なり。釈名門の中に総じて釈すはこれなり。また一を挙げればすなわち三。浄入願心の故に。広略略広、不縦不横、当体全くこれなり。また相別体一、同一涅槃誓願不可思議、一実真如中の徳用故に(従上の義義対は通途の中の一体三宝。初事、次理、後実に等しきなり。知るべし)。

「別相」とは、且く義章に依る。

まづ仏宝を明かす(乃至)開合不定、総じて唯一仏。あるいは分ちて二となす。二に[480b] 両門あり。一に生身・法身。二に真・応二に分つ。あるいは分ちて三となす。三に両門あり。一に法・報と応と開き三種に分かつ。地論(三の初紙)に説くがごとし。二に化・応及び真。金光明三身品の説くがごとし。あるいは分ちて四となすに両門あり。一に真を開き応に合す。楞伽の説のごとし。一に応化仏、二に功德仏、三に智慧仏、四に如如仏。(乃至)二に真応並びて開けば法報応化は涅槃(十)の説のごとし。あるいは分ちて十となす。華嚴の説のごとし。広すなわち無量、これ等は後の三仏章中のごとし(第十九の十八紙)。

次に法宝を弁ずれば、略して五種あり。一は教法、二に理法、三助道法、四涅槃法、五化用法(乃至)

次に僧宝を弁ずるに、中において開合すれば、総じて唯一僧。あるいは分ちて二となす。一とは三門。一に位に就いて二に分つ（仮名・眞実）。涅槃説のごとし。二に境に約して二に分つ（事理・理和）。三に法に随いて二に分かつ（羯磨・法輪）。あるいは説いて三となす。また三門あり。一に位について三を分つ（仮名・清浄・眞実）。二に行について三を分つ（破戒・愚痴・清浄）。三に大小に三を分つ（声聞・縁覚・菩薩）。あるいは四となす。大論の説のごとし（唾羊・無差・有差・眞実）。あるいは分ちて五となす（群僧・無讎・別衆・清浄・眞実）。毘曇中のごときは十四賢聖を説く。成実（一の三十七紙）は二十七賢を宣説す。大乘は四十一賢を宣説す。もし十信あらば五十一あり。これらは後の賢聖章中のごとし（第十七）。別体三宝これを弁じて粗しかり。

（大乘義章、大正四四、六五四中〜六五七上）

浄土の三宝は光寿無量、眞実報身を名けて仏宝となす。釈名門中の別釈これなり。

「為浅」等とは、甚だ深く及び難し故に且くこれを置く。

二に更に住持を積すに二。初の略積、二に広積。今は初。

[481a] 住持三宝止作大因縁

（住持の三宝とは、いまの浅識のために大因縁をなす。）

「住持」等とは、且く義章に依る。

小乘法の中、泥龕木像は住持佛となす。綿素竹帛は住持法となす。凡夫比丘は住持僧となす。

大乘法の中、住持に二あり（化用・実徳）。一に化用とは、八相成道を住持仏となす。言教流布を住持法となす。三乗諸衆を住持僧となす。

二に実徳とは、法身常住を住持仏となす。法性常恒を住持法となす。僧行不滅を住持僧となす。住持三宝はこれを弁ずるに粗しかり。

（大乘義章、大正四四、六五七中）

浄土三宝は、報応化身、弥陀釈迦十方諸仏を名けて仏法となす。随自随他の無量法門、一乗二乗権実顕密諸教、名けて法宝となす。「一切菩薩身、眷属等無量（乃至）正受金剛心、相応一念後、果徳涅槃者」を名けて僧宝となす。すなわち偈中の総じて帰するこれなり。まさに知るべし、通途同別並んで浄土の住持に属するものなり。分齊しかるが故に、今すなわち且く通途の釈に約するのみ。故に「与今」等と云うなり。

二に広釈に三。初に仏宝、二に法宝、三に僧宝。今は初。

今粗料簡^止当見真仏

（いまほ料簡すべし。仏宝といふは、いはく檀に彫り、綺に繡ひ、素質金容、玉を鏤め、繪に図し、石に磨り、土に削る。この靈像ことに尊承すべし。しばらく形を觀たてまつれば、罪消えて福を増す。もし少慢を生ずれば、惡を長じ善を亡ず。ただし尊容を想ふに、まさに真仏を見つべし。）

「雕檀」とは、統紀三十三（初）光顯志に云く、

帝釈仏に請い、切利天に昇りて母のために説法す。優填王（拘琰彌國王）觀如来を觀んと思ひ、すなわち旃檀をもって如来像を作る。高五尺（増一阿含經）。

（仏祖統紀、大正四九・三一八中）

「繡綺」とは、綺は細い綾なり。詩に云く「長斉繡仏前」、すなわちこの類なり。

「素質」とは、采色を加えざるなり。

「金容」とは、鑄像の金采像のごときなり。

「鏤玉」とは、彫刻の珠玉なり。

「図 [481b] 繪」とは、今本山より賜るところのごときこれなり。

「石土」とは知るべし。繪像木像靈感の縁なり。具さに珠林十三及び四、感応録下に出す。

「暫爾」等とは、那律天眼財首得道等のごとし（諸經要集一の四紙云々）。「但想」等とは、『月上女經』下に云々。止觀二の一（三十九）に云く、

およそ道場を建ててに、応に先に嚴淨すべし。しかる後に仏（※原本…像）を請う。世人の口は「道を求めて障を滅さん」と云いて道場を置くといえども、愚童の慢豎猥服裸形せしめて、云く「像を將いて来るか」と。把来のこれをもつてこれを觀る。悲しむべきにこれ甚だし。涅槃後分にて、阿難仏に問う。「仏滅度後いかに供養す」と。仏言く、「滅後、仏（※原本…像）を供養せば、在世と別なし。故に供養の福をして正道を助けしめ、善を生じ障を消す。あにまたこれに過ぎんや。」

（止觀輔行伝弘決、大正四六・一八九下）

二に法宝

言法宝者止身手清潔

（法宝といふは、三乗の教旨、法界の所流なり。名句の所詮、よく解縁を生ず。ゆゑにすべからく珍仰すべし。もつて慧を發す基なり。尊經を抄写してつねに淨室に安んぜよ。箱篋に盛れ貯へて、ならびに嚴敬すべし。誦誦の時は、身手清潔なれ。）

「三乗」とは声・縁・善なり。

能詮は教を曰う。所詮は旨を曰う。

「法界」等とは、『唯識』十に十真如を明かす中に云く、

第三勝流真如とは、謂くこれ真如所流の教法なり。仏教法において極めて勝れたるが故に。
（成唯識論、大正三一・五四中）

「名句」等とは、『唯識』二に云く、「名は自性を詮す。句は差別を詮す」と。すなわちこの字は二所依となす。

「發慧」等とは、序分義に云く、

これ經教はこれを喩ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ぬれば、智慧を開發す。もし智慧の眼開けぬれば、すなはちよく苦を厭ひて涅槃等を欣樂する
（註釈版七祖篇三八七）

余文解すべし。

三に僧宝

[482a] 言僧宝者_止勿生慢想

(僧宝といふは、聖僧・菩薩・破戒の流なり。等心に敬ひを起せ。慢想を生ずることなかれ。)

「聖僧」とは聖果を得るの僧なり。

「菩薩」とは知るべし。

「破戒」等とは、『地蔵十輪経』に云く、

縦い持戒破戒ありて、もしは長もしは幼、みな深敬すべし。輕慢を得ず。もしこの旨に違えば、交わりて重罪を獲る。

(法苑珠林、大正五三・四二三上)

三に無間修に三。初に法、二に譬、三に合。今は初。

三者無間_止心恒想巧

(三には無間修。いはくつねに念仏して往生の心をなす。一切時において心につねに想ひ巧め。)

一切時に有るは無間想なり。

「想巧」とは、意尽の謂なり。

二に譬

譬若有人_止縦任歛娛

(たとへば人ありて他に抄掠せられ、身下賤となりてつぶさに艱辛を受けんに、たちまちに父母を思ひて国に走り帰ることを欲す。行装いまだ弁ぜず。なほ他の郷にありて、日夜に思惟して、苦忍ぶるに堪へず。時としてしばらくも捨てて耶嬢を念ぜざることなきが、計をなすことすでに成じて、すなは

ち帰りて達することを得て、父母に親近してほしいままに歓娛するがごとし。)

「抄掠」とは、広韻に人・財物を劫じて、抄掠と云うなり。

「耶嬢」とは、増韻に父と謂いて耶と曰う。韻会は母と称して嬢と曰う。

三に合

行者亦然止心恒計念

(行者もまたしかなり。往因の煩惱、善心を壊乱し、福智の珍財ならびにみな散失して、久しく生死に流れて、制するに自由ならず。つねに魔王のために僕使となりて、六道に駆馳し、身心を苦切す。いま善縁に遇ひて、たちまちに弥陀の慈父、弘願に違はず群生を済抜したまふことを聞きて、日夜に驚忙して、心を発して往かんと願ふ。このゆゑに精勤して倦まずして、まさに仏恩を念ずべし。報じ尽すを期となして、心つねに計り念ふべし。)

「往因」等とは、「被他」等を合する。

「福智」等とは、「身為」等を合する。

「久流」等とは、「備受」等を合する。

「今遇」等とは、「忽思」等を合する。

「日夜」等とは、「日夜」等を合する。

譬の「為計」等と云う已下、合文なきといえども、生後の益に況す。意に逆いて知るべし。

四に無余修行

四者無余止留余課耳

(四には無余修。いはくもつぱら極樂を求めて弥陀を礼念するなり。ただし諸余の業行雜起せしめざれ。所作の業、日別にすべからく念仏・誦經を修すべし。余課を留めざるのみ」と。)

上に準じて知るべし。

三に私釈に二。初に煩文を厭う。二に要義を釈す。今は初。

[482b] 私云四修止恐繁而不解

(わたくしにいはく、四修の文見つべし。繁きを恐れて解せず。)

文意見るべし。

二に要義を釈すに二。初は難、二は通。今は初。

但前文中止有其意也

(ただし前文のなかに、すでに四修といひて、ただ三修のみあり。もしはその文を脱せるか、もしはその意あるか。)

文意見るべし。

二に通に三。初は総通、二は徴、三は別釈。今は初。

更非脱文止其深意也

(さらに脱文にあらず。その深き意を有するなり。)

一三通別はこの深義を謂う。

二に徴

何以得知

(なにをもつてか知ることを得る。)

文意見るべし。

三に別釈に二。初に具者を挙ぐ。二に欠者に通ず。今は初。

四修者一止無間修也

(四修とは、一には長時修、二には懃重修、三には無余修、四には無間修なり。)

「懃重修」とは、すなわち恭敬修。

二に欠者に通ずるに三。初は総通、二に別積、三に引例。今は初。

而以初長止後三修也

(しかるに初めの長時をもつて、ただこれ後の三修に通用す。)

文意見るべし。

二に別積

謂懃重者止長時修是也

(いはく懃重もし退せば、懃重の行すなはち成ずべからず。無余もし退せば、無余の行すなはち成ずべからず。無間もし退せば、無間の修すなはち成ずべからず。この三修の行を成就せしめんがために、みな長時をもつて三修に属して、通じて修せしむるところなり。ゆゑに三修の下にみな結して、「畢命為期誓不中止即是長時修」(礼讚)といふこれなり。)

文意見るべし。

三に例を引く

例如彼精止五度而已

(例するにかの精進の余の五度に通ずるがごときのみ。)

智論十八に云く、「菩薩摩訶薩は精進をもつて首となす。五度を行じて、すなわち精進と名く」と。

【科段⑧（随文积）】

九に四修章

標章

引文

礼讚

積 標

徵問

別積

恭敬修

初に正しく恭敬を積す

兼ねて長時を積す

無余修

初に正しく無余を積す

兼ねて長時を積す

無間修

初に正しく無間に積す

善に對して立つ

惡に對して立つ

兼ねて長時に積す

要決

積 標

長時修

恭敬修

積 標

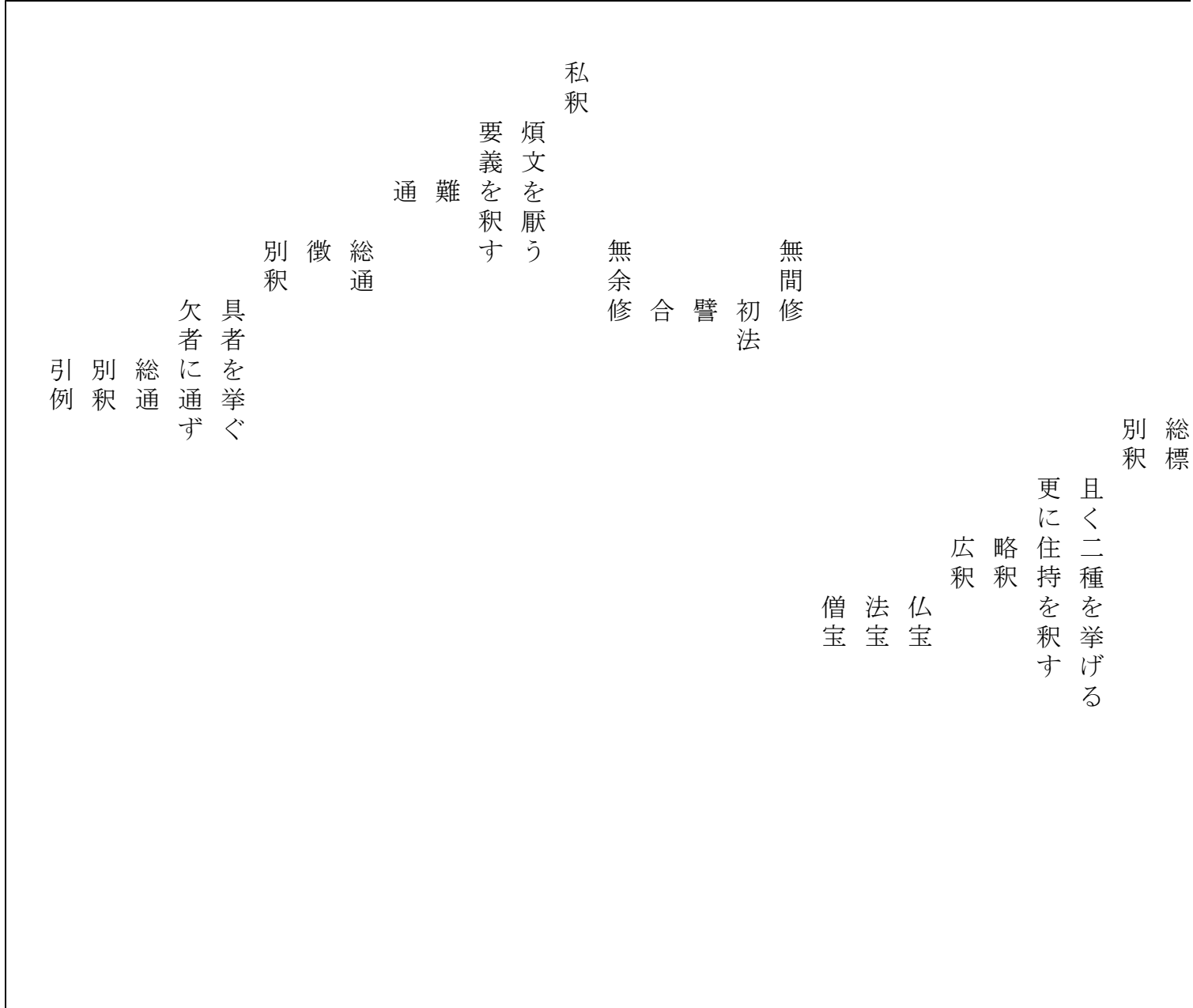
聖人を敬う

像教（經）を敬う

知識を敬う

同伴を敬う

三宝を敬う



十に化讚章に三。初に標章、二に引文、三に私釈。今は初。

[483a] 弥陀化仏_止之行之文

(弥陀の化仏来迎して、聞經の善を讚歎せずして、唯念仏の行を讚歎したまふ文)

今章の来意、上に準じて二義。もし文に約せば、『觀經』六文中の第四なり。もし義に約せば、三心四修、これよく修相以下の七章、所得の益を挙げ、念仏の功を助顯するものなり。

今すなわち第一は化讚の徳を挙ぐ。

化讚章とは、あるいは(決疑大綱)「化仏讚嘆篇」と云い、あるいは(鶻木私集要義等)「化仏讚嘆章」と云い、あるいは(聞香)「化讚章」と云う。今また略に従う。

問う。化仏讚嘆は真益となすや化益となすや。

答う。真化は機に在す。もしそれ化の機は即真の化を見る。故に化益と云いてまた得る。その真の機に至りて即化の真を見る。故に真益を云いてまた得る。終南吉水、即化の真に約す者なり。宗祖はすなわち否。隱顯義別、旨を得て領會す。

二に引文に二。初に經文、二に疏文。今は初。

觀無量壽經_止我来迎汝

(觀無量壽經に云はく、或いは衆生有りて衆の惡業を作り、方等經典を誹謗せずと雖も、此くのごときの愚人、多く衆惡を造りて慙愧有ること無し。命終らむと欲する時、善知識の為に大乘の十二部經の首題の名字を讚むるに遇はむ。是くのごときの諸經の名を聞くを以ての故に、千劫の極重の惡業を除却す。智者復教へて、掌を合せ手を又へて南無阿彌陀仏と稱せしむ。仏の名を稱するが故に五十億劫の生死の罪を除く。爾の時彼の仏、即ち化仏・化觀世音・化大勢至を遣はして、行者の前に至らしめ、讚めて言はく、善男子、汝仏名を稱するが故に諸の罪消滅すれば、我来りて汝を迎ふと。)

經の下上品の文なり。

「或有」等とは、総じて造悪の機を挙ぐ。
「作衆」等とは、造作衆罪を明かす。
「雖不」等とは、不謗大乘を明かす。
「如此」等とは、造悪は器にあらざるを明かす。
「無有」等とは、愧心を生ぜざるを明かす。
「命欲」等とは、命延びて久しからざるを明かす。
「遇善」等とは、たちまち知識に過（※遇）うを明かす。
「為讚」等とは、ために衆経を讚ずるを明かす。
「以聞」等とは、経を聞き罪を除くを明かす。
「智者」等とは、転経称名を明かす。
「称仏」等とは、称名の罪を除くを明かす。
「爾時」等とは、仏の化衆を遣わすを明かす。
「讚言」等とは、化衆の人を讚ずるを明かす。

[483b] 二に疏文

同経疏云止益也応知

（同経の疏に云はく、聞く所の化讚、但称仏の功を述べて、我来りて汝を迎ふと、聞経の事を論ぜず。然るに仏の願意に望むれば、唯励めて正念に名を称せしむ。往生の義、疾きこと雑散の業に同じからず。此の経及び諸部の中のごとき、処処に広く歎じて勧めて名を称せしむ。将に要益と為るなり、知るべしと。）

疏の散善義の文なり。

「所聞」等とは、直に本旨を述ぶる。

「然望」等とは、その所由を示す。

「如此」等とは、経を引きて要を結ぶ。すなわち下に謂う所の選択化讚の者これなり。また秃鈔に云く「選択讚嘆」はこれなり。

問う。今集は弥陀に約す。秃鈔は釈迦に約す。相違いかん。

答う。かしこは所を摂め能に属す。これは末に摂め本に帰す。秃録鈔のごとし（録）。

三に私積に二。初は化仏の讚嘆を積す。二に滅罪の多少を積す。今は初。

私云聞經止化仏讚嘆

（私に云はく、聞經の善是本願に非ず。雜業の故に化仏讚めたまはず。念仏の行は是本願正業の故に、化仏讚歎したまふ。）

これ二義あり。一は本願非本願に相對す。二は雜行正行に相對す。

二に滅罪の多少に二。初は標。二は積。今は初。

加之聞經止少不動也

（加之聞經と念仏とは滅罪の多少不同なり。）

さらに滅罪の多少の相對を加う。

二に積。

觀經疏云止罪多劫也

（觀經疏に云はく、問ひて曰はく、何が故ぞ、經を聞くこと十二部なるに、但罪を除くこと千劫、仏を稱すること一声するには、即ち罪を除くこと五百万劫なるは、何の意ぞや。答へて曰はく、造罪の人障重くして、加ふるに死苦來り逼むるを以てす。善人多經を説くと雖も、餐受の心浮散す。心散ずるに由るが故に、罪を除くこと稍輕し。又仏名は一なれば、即ち能く散を摂して以て心を住せしむ。復教へて正念に名を稱せしむ。心重きに由るが故に、即ち能く罪を除くこと多劫なりと。）

疏の意解すべし。

問中の千劫これ五百万劫と、校量の多少せば、五千倍なり。

答中に二義。一は境の多少相對、二は心散不散相對。

【科段⑧（随文釈）】

十に化讚章

標章
引文

經文
疏文

私積

化仏の讚嘆を積す

罪滅の多少を積す

標積

十一に約対章に三。初に標章、二に引文、三に私釈。今は初。

約対雑善^止念仏之文

(雑善に約対して念仏を讚歎する文)

今章の来意、上に准ずるに二義。もし【484a】文に約せば、『觀經』六文中の第五なり。もし義に約せば、所得の益を挙げる中の第二なり。称讚の益を挙ぐ。

二に引文に二。初は經、二は疏文。今は初。

觀無量寿^止生諸仏家

(觀無量寿經に云はく、若し仏を念ぜむ者、当に知るべし、此の人は即ち是人中の分陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩、其の勝友と為る。当に道場に坐して諸仏の家に生るべしと。)

文義下のごとし。

二に疏文

同經疏云^止之座豈賒

(同經の疏に云はく、若念仏者といふより下生諸仏家に至るまでより已来は、正しく念仏三昧の功能超絶して、実に雑善の比類と為ることを得るに非ざることを顯す。即ち其の五有り。一には専ら弥陀仏名を念ずることを明かし、二には能念の人を讚むることを明かし、三には若し能く相續して念仏すれば、此の人甚だ希有と為、更に物として以て之に方ぶべきこと無きことを明かす。故に分陀利を引きて喩へと為。分陀利と言ふは、人中の好花と名づけ、亦希有花と名づけ、亦人中の上上花と名づけ、亦人中の妙好花と名づく。此の花相伝して蔡花と名づく。是の念仏の者は、即ち是人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。四には専ら弥陀の名を念ずれば、即ち觀音・勢至常に随ひて影護したまふこと、亦親友知識のごとくなることを明かすなり。五には今生に既に此の益を蒙り

て、命を捨てて即ち諸仏の家に入ることゝ明かす。即ち浄土是なり。彼に到り長時に法を聞きて歴事し供養す。因円かに果満ず。道場の座、豈餘からむや。）

信末（十紙）に全くこれを引く。六要三末（十四紙）に云く、

「分陀利」とは、蓮の中の好花、西天にこれを翫ぶことこの桜梅のごとし。この故にこれをもって今の行人に喩う。憬興師の云く、「分陀利花」はすなわち白蓮華なり。水陸の花の中に最も尊勝となす」。『大日経』に依るに蓮花に五あり。一には鉢頭摩、二には優鉢羅、各二色あり、謂く赤と白と。三には俱勿頭、また二色あり、謂く赤と白と。四には泥盧鉢羅、この花極て香し、牛糞より生ず。五には分荼利迦、葉々相承て円整して愛しつべし、最外の葉極て白く、内色漸く微黄なり、この花極て香し。「蔡華」と言うは、これ蓮花の名。『論語』の意に依に、「蔡」とは龜なり。意は龜の遊ぶ所の花なるが故にすなわち龜と云う、その体蓮花なり。花の中に蓮勝れ、蓮花の中にこの花殊に勝たり。宜なるかな、この花、経には題目たり、仏にはまた眼たり、あに凡種に比せんや。しかるに仏世尊念仏の人をもって、この好花に譬たまう。尤もこれ奇妙の法となす。蓮華に（※**原本**・尤も奇となすに足れり。『妙法蓮花』に）当体・譬喩二義ありと雖も共に所行の法、今の『観経』の説は能行の人を嘆ず。もし所行に約せば定また同じかるべし。能所[484b]殊なりといえども、恐らくは弥陀・妙法同体の深旨を顕すか。また『涅槃』（※**北本卷一八梵行品*****南本卷一六梵行品**）云く、「これ人中の蓮花、芬陀利華。」（已上）しかるにかの文の意は、仏に譬えてこれを説く。これに准じてこれを思うに、念仏の行人すなわち如来功德の義分を備う。この喩かの染香人の身にその香氣あるがごとし。これすなわち今この弥陀の名号は、かの法性无漏の果徳より流出する所の妙好香なり。これを唱えてこれを念ずるに、口に薫じ心に薫じて、知らざるに自ら無量万徳の功德香氣あり。故に潜に仏の功德の気分を備う。この故に弥陀の五智の功德を信知して、名号を称念すれば、本覚の心蓮冥に漸く生長して、諸法無生甚深の一分の理を開発するなり。尤もこれを貴ぶべし。「即入」等は、すなわちこれ往生即始益たり。「道場と」等は、すなわちこれ成仏即終益た

り。問。『経』文のごときは、先づ（※観經）「当坐道場」と云て初めに成仏の果を説き、次に（※観經）「生諸仏家」と云て後に往生の益を挙ぐ。今の釈前後相違如何。答。『経』は従果向因の義に依り、釈は従因至果の意を存す。影略互頭、その義炳然なり。（已上全文）

（浄真聖四・一一四六～一一四七）

問う。始益終益、異時たるか。同時たるか。

答う。六要三本（四）に云く、

もし差別門に依らば且く分証に約すべし（乃至）もし平等門に依らばすなわち極果に約すべし。往生・成仏始終の益なりと雖も、時に前後なし、是れ同時なるが故に。（已上）

（浄真全四・一一三四）

この釈の片言をもって獄を断ずべきのみ。いわんや今文従果向因等を云うか。偈に曰く、「是人名分陀利華」、讚に云く「希有最勝人とほめ 正念をうとはさだめたれ」（註釈版五九二）と。実に感戴すべきかな。

[485a] 三に私釈に三。初に章の大意を釈す。二に五種の譽を釈す。三に種々の益を釈す。初に章の大意を釈すに二。初に問、二に答。今は初。

私問曰経止嘆念仏乎

（私に問ひて曰はく、経には、若し仏を念ぜむ者、当に知るべし、此の人等と云ふは、唯念仏者に約して之を讚歎す。釈の家何の意有りてか、実に雑善の比類と為ることを得るに非ずと云ひて、雑善に相對して独り念仏を歎むるや。）

文に就いてこれを求むに約對の義なし。故にこの問あり。

二に答

答曰文中止余善諸行

（答へて曰はく、文の中に隠れたりと雖も、義意是明らけし。知る所以は、

此の経既に定散の諸善並びに念仏の行を説きて、其の中に於て孤り念仏を標して芬陀利に喩ふ。雑善に待するに非ずは、云何が能く念仏の功の余善諸行に超えたることを顕さむ。）

楷定の意に依らば、比況皆存す。故に今巧みに約対積義を作す。念仏の利益を助顕するのみ。

二に五種の誉を積すに三。初に総じて五種を積す。二に別して上上を積す。三に下をもつて上を難ず。今は初。

然則念仏止而所褒也

（然れば則ち念仏者は即ち是人中の好人とは、是悪に待して美むる所なり。人中の妙好人と言ふは、是麤悪に待して称する所なり。人中の上上人と言ふは、是下下に待して讚むる所なり。人中の希有人と言ふは、是常有に待して歎むる所なり。人中の最勝人と言ふは、是最劣に待して褒むる所なり。）

今試みに略して五種の名義を解す。

「好人」と言うは、すなわち好醜対。觸光柔軟故に好と言う。妙とはすなわち妙麤対。香光莊嚴故に。

問う。文に香義なし。今何ぞこれを加う。

答う。上に云わざるか。「かの染香人の身にその香氣あるがごとし」等と。故に義を加えるのみ。

「上上」と言うは、すなわち上上下下対。至徳具足故に。

「希有」と言うは、すなわち希常対。極難信法を信受するが故に。

「最勝」と言うは、すなわち勝劣対。極善最上の法を奉行するが故に。

二に別して上上を積すに二。初に問答分別、二に二教を引いて例す。初の問答分別に二。初は問、二に答、今は初。

[485b] 問曰既以止説念仏乎

（問ひて曰はく、既に念仏を以て上上と名づけば、何が故ぞ、上上品の中に説かずして下下品に至りて念仏を説くや。）

問意見るべし。文に就いて難を起す。

二に答。

答曰豈前_止最上之法

(答へて曰はく、豈前に云はずや。念仏の行は広く九品に互ると。即ち前に引く所の往生要集に、其の勝劣に随ひて九品を分つべしと云ふ是なり。加之下品下生は是五逆重罪の人なり。而るに能く逆罪を除滅すること、余行の堪へざる所なり。唯念仏の力のみ有りて、能く重罪を滅するに堪へたり。故に極悪最下の人の為に極善最上の法を説く所なり。)

答意見るべし。義に依りて通となす。なかんづく「為極」等の積、二信の義を顕す。希奇と言うべし。

二に二教を引きて例すに二。初に顕教に約す。二に密教に約す。初に顕教に約すに二。初に正引、二に会釈。今は初。

例如彼無_止即不能治

(例するに、彼の無明淵澄の病は、中道府蔵の薬に非ずは即ち治すること能はざるがごとし。)

「無明」はこれ法、「淵源」はこれ踰。二惑はこれ無明においてなお流派の淵源においてのごとし。

「中道」はこれ法、「府蔵」はこれ踰。空仮は中道においてなお皮肉の腑臓においてのごとし。

二に会釈。

今此五逆_止何治此病

(今此の五逆は重病の淵源なり。亦此の念仏は靈薬の府蔵なり。此の薬に非ずは、何ぞ此の病を治せむ。)

天台觀經疏に云く、

この経はよく五逆の罪を滅し浄土に往生せしむ。すなわちこれこの経の大力用なり。

妙宗釈に云く、

悪の重きものとは五逆に過ぎたるはなし。この業上品の煩惱に従いて起る。無間の苦を招く。この経の大力よく五逆これらの極重の三障を滅し、すなわち浄土に生ず。

等と。かくのごときこの釈義は異なると雖も宗致益を談ずるに全く同じ。

信末（十三紙）に云く、

それ仏、難治の機を説きて、『涅槃経』（現病品）にのたまはく、「迦葉、世に三人あり、その病治しがたし。一つには謗大乘、二つには五逆罪、三つには一闡提なり。かくのごときの三病、世のなかに極重なり。ことごとく声聞・縁覚・**[486a]**菩薩のよく治するところにあらず。善男子、たとへば病あればかならず死するに、治することなからんに、もし瞻病随意の医薬あらんがごとし。もし瞻病随意の医薬なからん、かくのごときの病、さだめて治すべからず。（乃至）

ここをもつて、いま大聖（釈尊）の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと、知るべし。（已上）

（註釈版二六六～二九六）

超世の願功、別意の真益、それここに在る。

二に密教に約すに二。初に正引、二に会釈。初の正引に二。初に標題、

二に正文、今は初。

故弘法^止皆悉憶持

(故に弘法大師の二教論に、六波羅蜜經を引きて云はく、第三に法宝といふは、所謂過去無量の諸仏所説の正法、及び我が今の所説なり。所謂八万四千の諸の妙法蘊なり。乃至有縁の衆生を調伏し純熟して、阿難陀等の諸大弟子をして、一たび耳に聞きて皆悉く憶持せしむ。)

すなわち下巻の文なり。

「六波羅蜜經」とは、具さに『大乘理趣六波羅蜜多經』を云う。十卷(馨函入)、般若訳。

二に正文に二。初に標列五分、二に解釈五分。今は初。

撰為五分^止陀羅尼門

(撰して五分と為。一には素■纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜多、五には陀羅尼門なり。)

初の三は小乗、第四は大乘、第五は密乗。文義は下のごとし。

二に解釈五分に三。初に標釈、二に別釈。三に喩顯。今は初。

此五種藏^止而為説之

(此の五種の藏は有情を教化して、度すべき所に随ひて為に之を説く。)

文意見るべし。

二に別釈に五。初に素咀纜、二に毘奈耶、三に阿毘達磨、四に般[486b]若、五に陀羅尼。今は初。

若彼有情^止素咀纜藏

(若し彼の有情、山林に処せむと樂うて、常に閑寂に居して静慮を修せむ者

には、而も彼の為に素咀纜蔵を説く。）

経蔵は定を詮ずる。文相解すべし。

二に毘奈耶

若彼有情止毘奈耶蔵

（若し彼の有情、威儀を樂ひ習ひ、正法を護持して、一味和合して久住することを得しめむには、而も彼の為に毘奈耶蔵を説く。）

律蔵は戒を詮ずる。文相解すべし。

三に阿毘達磨

若彼有情止毘達磨蔵

（若し彼の有情、正法を樂ひて説き、性相を分別し、循環研覈して甚深を究竟せむには、而も彼の為に阿毘達磨蔵を説く。）

論蔵は慧を詮ずる。文相解すべし。

四に般若

若彼有情止波羅蜜多蔵

（若し彼の有情、大乘真実の智慧を樂ひ習ひて、我法執着の分別を離れむには、而も彼の為に般若波羅蜜多蔵を説く。）

真空妙有、八不中道、諸大乘教を悉く撰める。この中の法門の配属、自在にして源を合す。概論すべからず。

五に陀羅尼

若彼有情止陀羅尼蔵

(若し彼の有情、契経・調伏・対法・般若を受持すること能はず、或いは復有情、諸の悪業を造らむ。四重・八重・五無間罪・謗方等経・一闡提等の種の重罪をして銷滅することを得しめ、速やかに解脱し、頓く涅槃を悟らしめむには、而も彼の為に諸の陀羅尼蔵を説く。)

「四重」等とは、男の四重、女の八重、楞嚴に云うに、「四棄八棄」と。

「五無」等とは、五逆罪なり。

「謗方」等とは、誹謗罪なり。

「一闡」等とは、涅槃二十二に云く、「一闡を信と名く。提を不具と名く。信不具故に一闡提と名く」と。

「使得」等とは、その益相を示す。いわゆる極悪最下の機のために極善最上の法を説くものなり。

三に喩頌

此五法蔵止法身(已上)

(此の五蔵は、譬へば乳・酪・生蘇・熟蘇及び妙醍醐のごとし。契経は乳のごとく、調伏は酪のごとく、対法教は彼の生蘇のごとく、大乘般若は猶熟蘇のごとく、総持門は譬へば醍醐のごとし。醍醐の味はひ乳・酪・蘇の中に微妙第一なり。能く諸病を除きて、諸の有情をして身心安樂ならしむ。総持門は契経等の中に最も第一と為。能く重罪を除き、諸の衆生をして生死を解脱して速やかに涅槃安樂法身を証せしむと。 已上)

喩は涅槃聖行品に出して云々。 [487a] 密家積義は後をもつて密宗を配す。宗に判あること概論すべからず。文意見るべし。

三に会釈

此中五無止難治応知

(此の中、五無間罪は是五逆罪なり。即ち醍醐の妙薬に非ずは、五無間の病甚だ療し難しと為。念仏も亦然なり。往生の教の中に念仏三昧は是総持のごとく、亦醍醐のごとし。若し念仏三昧の醍醐の薬に非ずは、五逆深重の病は

甚だ治し難しと為、知るべし。）

文意見るべし。近くは諦忍あり。念仏無上醍醐篇、及び醍醐念仏秘要蔵と作す。いまだ弘願の堂奥に達すことあたわずといえども、傍讚の功、ほとんど真に逼る。大いに近世の諸の密家師の拙者と異なるか。

三に下をもつて上を難ずに二。初に問。二に答。今は初。

問曰若爾止説念仏乎

（問ひて曰はく、若し爾らば下品上生は是十悪軽罪の人なり。何が故ぞ念仏を説くや。）

問の意見るべし。

二に答に二。初に一往に約す。二に再往に約す。初に一往に約すに三。初に念仏の深徳、二に諸行の浅徳、三に喩頭。今は初。

答曰念仏止況軽罪哉

（答へて曰はく、念仏三昧は重罪尚滅す。何に況や軽罪をや。）

答の意見るべし。

二に諸行の浅徳

余行不然止而不消二

（余行は然らず。或いは軽を滅して重を滅せざる有り。或いは一を消して二を消さざる有り。）

念仏諸善比校対論に、浅深勝劣何止五三、具さに四十八対等のごとし。応のごとく知るべし。

三に喩頭

念仏不然^止為王三昧

(念仏は然らず。軽重兼ね滅す、一切遍く治す。譬へば阿伽陀薬の遍く一切の病を治するがごとし。故に念仏を以て王三昧と為。)

「阿伽陀」とは、弘決一に云く、

華嚴經に云く、「阿伽陀薬の衆生見るものは衆病失除す」と。名義集に云く、「阿伽陀[487b]、これ普法と云う。よく衆病を去る」と。『心地觀經』に云く、「善男子、阿伽陀薬のよく衆病を療するがごとく、もし病のある者は眼にこれ必ず差す。その病すでに愈え、薬は病に随い除く」と(已上)

「王三昧」とは、華嚴に云く、「一切三昧中の王故に」等と。

凡九品配^止八十一品也

(凡そ九品の配当は一往の義なり。五逆の廻心上上に通ず。誦誦の妙行亦下下に通ず。十悪の軽罪、破戒の次罪各上下に通じ、解第一義、發菩提心亦上下に通ず。一法に各九品有り。若し品に約せば即ち九九八十一品なり。)

文意見るべし。

二に無尽数に約す。

加之迦才^止莫起封執

(加之迦才の云はく、衆生行を起すに既に千殊有り。往生して土迦見ること亦万別有りと。一往の文を見て封執を起すこと莫れ。)

浄土論の上卷文なり。

三に種々の益を明かすに二。初に正しく諸益を明かす。二に上の諸益を結す。初の正しく諸益を明かすに二。初に現当の益を明かす。二に始修

(※終)の益を明かす。初に現当の益を明かすに三。初に現益、二に当益、三に結嘆。初の現益に二。初に称讚の益、二に護念の益。今は初。

其中念仏止譬意応知

(其の中に念仏は是即ち勝行なり。故に芬陀利を引きて、以て其の喩譬と為意知るべし。)

いわゆる諸仏称讚の益なり。

二に護念の益

加之念仏止余行不爾

(加之念仏行者をば観音・勢至、影と形とのごとく暫くも捨離せず。余行は爾らず。)

いわゆる冥衆護持の益なり。

二に当益

又念仏者止余行不定

(又念仏者は、命を捨て已りて後決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。)

ここを捨てかしこに生ずる当益の相なり。

三に結嘆

[488a] 凡流五種止是当益也

(凡そ五種の嘉誉を流し、二尊の影護を蒙る、此は是現益なり。亦浄土に往生して、乃至仏に成る、此は是当益なり。)

「流五」等とは、称讚の益を結ぶ。

「蒙二」等とは、護持の益を結ぶ。
「亦往」等とは、往生の益を結ぶ。

二に始終の益を明かすに二。初に総標、二に集を引く。今は初。

又道綽禪師^止始終兩益

(又道綽禪師念仏の一行に於て始終の兩益を立つ。)

文意見るべし。

二に集を引くに二。初に始益、二に終益。今は初。

安樂集云^止此名始益

(安樂集に云はく、念仏の衆生を撰取して捨てたまはず、寿尽きて必ず生ず。此を始益と名づく。)

心光常護の益
なり。

二に終益

言終益者^止其終益也(已上)

(終益と言ふは、觀音授記經に依るに、阿弥陀仏世に住すること長久にして、兆載永劫に亦滅度したまふこと有り。般涅槃の時、唯觀音・勢至有りて、安樂に住持し、十方を接引す。其の仏の滅度亦住世と時節等同なり。然るに彼の国の衆生は、一切、仏を觀見する者有ること無し。唯一向に専ら阿弥陀仏を念じて往生する者のみ有りて、常に弥陀は現に在して滅したまはずと見る。此は即ち是其の終益なり。已上)

真土化生主伴不二の妙益なり。

二に上の諸益を結する

当知念仏止兩益応知

(当に知るべし。念仏は此くのごとき等の現当二世、始終の兩益有り、知るべし。)

「現当」等とは、現当益の始終を結ぶ。

【科段⑧（随文釈）】

十一に約対章

標章

引文

經

疏文

私釈

意の大意を釈す。

問

答

五種の譽を釈す

総じて五種を釈す

別して上上を釈す

問答分別

問

答

二教を引いて例す

頭教に約す

正引

会釈

密教に約す

正引

標題

正文

標列五分

終益 始益 集を引く 総標 始終の益を明かす 結嘆 当益 護念の益 称讚の益 現益 現当の益を明かす 正しく諸益を明かす 種々の益を明かす。 無尽数に約す 九九数に約す 再往に約す 諸行の浅徳 念仏の深徳 一往に約す 答 問 下をもつて上を難ず 会釈 別釈 標釈 解釈五分 素咀纜 毘奈耶 阿毘達磨 般若 陀羅尼 喻頌

上の諸益を結す

十二に付属章に三。初に標章、二に引文、三に私釈。今は初。

釈尊不付止阿難之文

【12】釈尊定散の諸行を付属せず、ただ念仏をもつて阿難に付属したまふ文。）

今章の来意、上に准じて二義。

もし文に約さば、『観経』六文の第六なり。

もし義に約さば、利益七文の第三なり。

「付属章」とは、あるいは（決疑）「付属仏名篇」と云い、あるいは（大綱）「付属阿難篇」と云い、あるいは（要義）「付属念仏章」と云い、あるいは（鶴木私集聞香）「付属章」と云う。今はまた略に従う。

「付属」とは【488b】妙句十の一に依りて云く、

付属の文に四となす。一に称嘆付属、二に結要付属、三に勧奨付属、四に釈付属意（神力品より出す）

今はまた准じて解す。大本の弥勒付属の文の云々は、称嘆付属なり。今章の云々は、結要付属なり。また大本に云う「設有大火」等とは、勧奨付属なり。また「もし衆生ありてこの経を聞くものは、無上道においてつひに退転せず。このゆゑにまさに専心に信受し、持誦し、説行すべし」と云い、あるいは「特留此経」と云い、あるいは「当座道場」（註釈版一一七）等と云うは、みな付属の意に釈するなり。

化本に（二十二紙）に云く、『観経』にのたまはく、「仏阿難に告げたまはく」（註釈版四〇一）等、また云く、「（仏告阿難汝好持是語）より」（註釈版四〇三）已下等なり。

問う。この文の至要、何ぞ化に属すや。

答う。名号定散対意なり。経は隠顕に亘る。疏文もまたしかり。かの所引のごとし。けだし顕意のみ。意に逆らつて領会す。

二に引文に二。初に経文、二に疏文。今は初。

観無量寿止無量寿仏名

(『観無量寿経』にのたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、へなんぢよくこの語を持って。この語を持つてとは、すなはちこれ無量寿仏の名を持つてとなり」と。)

経は流通文なり。

二に疏

同経疏云止弥陀仏名

(同経の『疏』(散善義)にいはいはく、「へ仏告阿難汝好持是語」といふより以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、遐代に流通することを明かす。上よりこのかた定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつばら弥陀仏の名を称せしむるにあり」と。)

漢語灯(十八丁右)に云く、

一時師語りて曰く、一日予月輪禪閣の館に遊ぶ。たまたま山僧某と会す。僧予に問て曰く、「**※聞く、公**浄土宗を立てると、しかりや」。**「※予」**答えて曰く「しかるなり」。また問う。「何れの経論に依りてこれを立つるや」。答えて曰く、「善導の観経疏中付属の釈文に依りてこれを立つ」と。僧云**「※曰」**く、「それ宗義を立てるに何ぞただ一**[489a]**文に依るや」。予微笑して答えず。かの僧山に還りて、宝池の真公に語りて曰く、「空公わが問いを得て答えることあたわず」と。真公曰く、「空公答えざるは、あたわざるにはあらず。答に足らざるをもつての故なり。空公はわが台宗においてすでに達人たり。かつ広く諸宗に陟亘して、神智高邁なり。子也自ら問う所の浅薄を料て、あえて空公を軽蔑することなかれ」と。

(拾遺語灯録、浄土宗全書九・四六二) **「※参照」** 浄真全六・三八七)

三に私積に二。初に標列、二に解釈。今は初。

私云案疏^止二念仏

(わたくしにいはいはく、『疏』(散善義)の文を案ずるに二行あり。一には定散、二には念仏なり。)

いわゆる名号定散対なり。

二に解釈に二。初に定散、二に念仏。初の定散に三。初に標列、二に解釈、三に結文。今は初。

初言定散^止二散善

(初めに定散といふはまた分ちて二となす。一には定善、二には散善なり。)

外はすなわち八万四千の仮門、内はすなわち定散二善の要門。名異体同にして、ならんでこれ修諸功德の派なり。

二に解釈に二。初に定善、二に散善。初の定善に二。初に十三観を明かす。二にその益相を明かす。今は初。

初付定散^止具如經說

(初めに定善につきて、その十三あり。一には日想観、二には水想観、三には地想観、四には宝樹観、五には宝池観、六には宝楼阁観、七には華座観、八には像想観、九には阿弥陀仏観、十には観音観、十一には勢至観、十二には普往生観、十三には雜想観なり。つぶさに經說のごとし。)

玄義に云く、

一には依報、二には正報なり。(止)また依報といふは、日観より下華座観に至るこのかたは、総じて依報を明かす。この依報のなかにつきてすなはち通あり別あり。別といふは、華座の一観はこれその別依なり、

ただ弥陀仏に属す。余の上の六観はこれその通依なり、すなはち法界の凡聖に属す。ただ生ずることを得れば、ともに同じく受用す。ゆゑに通といふ。またこの六のなかにつきて【489b】すなはち真あり仮あり。仮といふはすなはち日想・水想・氷想等、これその仮依なり。これこの界中の相似可見の境相なるによるがゆゑなり。真依といふは、すなはち瑠璃地より下宝楼観に至るこのかたは、これその真依なり。これかの国の真実無漏の可見の境相なるによるがゆゑなり。二には正報のなかにつきてまたその二あり。一には主莊嚴、すなはち阿弥陀仏これなり。二には聖衆莊嚴、すなはち現にかしこにある衆および十方法界同生のものこれなり。またこの正報のなかにつきてまた通あり別あり。別といふはすなはち阿弥陀仏これなり。すなはちこの別のなかにまた真あり仮あり。仮正報といふはすなはち第八の像観これなり。観音・勢至等もまたかくのごとし。(止) 真正報といふはすなはち第九の真身観これなり。(止) 通正報といふはすなはち観音聖衆等以下これなり。

(註釈版七・三〇二)

二にその益相を明かす。

縦雖無余止敢莫疑慮

(たとひ余行なしといへども、あるいは一、あるいは多、その所堪に随ひて十三観を修して往生を得べし。その旨『経』(観経)に見えたり。あへて疑慮することなかれ。)

隠顕真化は応ずるがごとく知るべし。

二に散善に二。初に標列、二に解釈。今は初。

次付散善止二者九品

(次に散善につきて二あり。一には三福、二には九品なり。)

三福の正因は粟の蔵にあるがごとし。九品の正行は苗の田に植えるがごとし。体一相異にして、比校知るべし。

二に解釈に二。初に三福、二に九品。初の三福に二。初に経文を挙ぐ、二に文に随いて解す。今は初。

初三福者^止（已上経文）

（初めの三福とは、『経』（同）にのたまはく、「一には孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業。二には受持三帰、具足衆戒、不犯威儀。三には発菩提心、深信因果、読誦大乘、勸進行者なり」と。（以上経文）

第一は世福、第二は戒福、第三は行福。[490a] 応ずるがごとくこれを思え。

二に随文解に九。初に孝養父母等、二に悲心不殺等、三に受持三帰、四に具足衆戒、五に不犯威儀、六に発菩提心、七に深信因果、八に読誦大乘、九に勸進行者。初の孝養父母等に二。初に正積、二に結益。初の正積に二。初に孝養父母、二に奉事師長、初の孝養父母に二。初に標列、二に解釈。今は初。

孝養父母^止出世孝養也

（「孝養父母」とは、これにつきて二あり。一には世間の孝養、二には出世の孝養なり。）

文意見るべし。

二に解釈

世間孝養^止縁奉仕法

（世間の孝養とは『孝経』等の説のごとし。出世の孝養とは律中の生縁奉事の法のごとし。）

「孝養」とは、『妙楽』に云く、「孝は孝順、養は養育」と。

「如孝」等とは、前漢書芸文志に云く、「孝経とは孔子の曾子になすを孝

道と陳ぶるなり」と。

「如律」等とは、『行事鈔』（四分律刪繁補闕行事鈔）下三の四（二十八紙）に「生縁奉訊法」を明して云く、

仏言わく、「もし人ありて百年の中、右肩に父を擔ぎ、左肩に母を擔ぎ、上に大小の便利、世の珍奇の衣服を極めて供養すとも、なお須臾の恩に報いるにあたわず。したがって今、比丘の尽心に父母を供養するを聴く。しからずば重罪を得る。」
（大正四〇・一四〇下）

二に奉事師長に二。初に標列、二に解釈。今は初。

奉事師長止世間長也

（「奉事師長」とは、これにつきてまた二あり。一には世間の師長、二には出世の師長なり。）

奉は奉行。
事は給事。

二に解釈

[490b]世間師者止門等師也

（世間の師とは仁・義・礼・智・信等を教ふる師なり。出世の師とは聖道・浄土の二門等を教ふる師なり。）

「教仁」等とは、出世を戒と曰う。世間を常（五常）と曰う。
「教聖」とは知るべし。

二に結益

縦雖無余止往生業也

（たとひ余行なしといへども、孝養・奉事をもつて往生の業となすなり。）

中下の品相なり。

二に慈心不殺等に二。初に標列、二に解釈。今は初。

慈心不殺_止此有二義

(「慈心不殺、修十善業」とは、これにつきて二義あり。)

文意見るべし。

二に解釈に二。初に開に約す。二に合に約す。初の開に約すに三。初に四無量、二に結益、三に十善業。今は初。

一者初慈心_止撰後三也

(一には初めの「慈心不殺」とは、これ四無量心のなかの初めの慈無量なり。すなはち初めの一を挙げて後の三を撰するなり。)

慈に三縁あり。余の三はまたしかり。浅深の重重、応のごとくこれを思え。

二に結益

縦雖無余_止往生業也

(たとひ余行なしといへども、四無量心をもつて往生の業となす。)

上上の品相なり。

三に十善業

次修十善_止不邪見也

(次に「修十善業」とは、一は不殺生、二は不偷盜、三は不邪淫、四は不妄語、五は不綺語、六は不悪口、七は不両舌、八は不貪、九は不瞋、十は不邪見なり。)

上上の品相なり。

二に合に約して二。初は正積、二は結益。今は初。

二者合慈_止之一句也

(二には「慈心不殺、修十善業」の二句を合して一句となすとは、いはく初めの「慈心不殺」は、これ四無量のなかの慈無量にはあらず。これ十善の初めの不殺を指す。ゆゑに知りぬ、まさしくこれ十善の一句なり。)

文意見るべし。

二に結益。

[491a] 縦雖無余_止往生業

(たとひ余行なしといへども、十善業をもつて往生の業となす。)

上上の品相なり。

三に受持三帰に二。初に標、二に列。今は初。

受持三帰_止就此有二

(「受持三帰」とは仏法僧に帰依するなり。これにつきて二あり。)

文意見るべし。

二に列

一者大乘_止乘三帰也

(一は大乘の三帰、二は小乗の三帰なり。)

もし小乗に約すれば中二の品相。もし大乘に約すれば上上の品相。

「大乘三帰」とは、三聚十重等の戒を受けんがために、通じて同別住等の

三宝に帰す。

「小乗の三帰」とは、五八十具等の戒を受けんがために、先に理体の化相・住持三宝に帰す。応のごとくこれを知る。

四に具足衆戒に二。初に標、二に列。今は初。

具足衆戒者此亦有二

(「具足衆戒」とは、これに二あり。)

文意見るべし。

二に列

一者大乘止小乘戒也

(一は大乘戒、二は小乘戒なり。)

上に准じて解すべし。序分義に云く、

「具足衆戒」といふは、しかるに戒に多種あり。あるいは三帰戒、あるいは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・沙弥戒、あるいは菩薩の三聚戒、十無尽戒等なり。ゆゑに具足衆戒と名づく。

(註釈判版七・三八五)

大小の三分、義は准じて知るべし。

五に不犯威儀に二。初に標、二に列。今は初

不犯威儀者此亦有二

(「不犯威儀」とは、これにまた二あり。)

文意見るべし。

[491b] 一者大乘^止謂有三千

(一は大乗、いはく八万あり。二は小乗、いはく三千あり。)

「三千」は威儀。

「八万」は細行。

六に発菩提心に二。初は正積、二に結益。初の正積に三。初に諸家を挙ぐ、二に宗家を示す。三に通勸。初に諸家を挙ぐに二。初に総じて不同を標す。二に別して五家を列す。今は初。

発菩提心^止意不同也

(「発菩提心」とは、諸師の意不同なり。)

文意見るべし。

二に別して五家を列すに四。初に天台、二に真言、三に華嚴、四に三論法相。今は初。

天台即有^止如止觀說

(天台にはすなはち四教の菩提心あり。いはく藏・通・別・円これなり。つづぎには『止觀』の説のごとし。)

止觀一の二(四十七)の意に謂く、「四諦は各四、生滅、無生、無量、無作。ここをもつて境となす。道心にまた四。次のごとく藏通別円なり」。

二に真言

真言即有^止提心論說

(真言にはすなはち三種の菩提心あり。いはく行願・勝義・三摩地これなり。つづぎには『菩提心論』の説のごとし。)

「論一卷」とは龍樹の造、不空の訳。意に謂く、「行願とは利他大悲、俗

有の義。勝義とは自利大智、真空の義。三摩地とは三秘密觀。本有大定・悲智窮極・即身成仏等なり」。

三に華嚴

[492a] 華嚴亦有止樂道等說

(華嚴にはまた菩提心あり。かの『菩提心義』および『遊心安樂道』等の説のごとし。)

「菩提心義」とは、『続開元録』下に云く、

『發菩提心義』一卷(六紙)、翻經講論は大徳大興善寺の沙門潜真勅を奉じて選す。(大正五五・七六九上)

『宋僧伝』五(十八)の潜真伝に云く、「述菩提心義、發菩提心義、各一卷。三聚淨戒及び十善法戒共に一卷」等と。

すなわち今指す所これなり。安然の詮ずる所の菩提心義にあらざるなり。「遊心安樂道」とは、上のごとく新羅元暁の撰ずる所なり。意に謂く、「菩提に二あり。謂く随事純理等なり」。

四に三論法相

三論法相止章疏等說

(三論・法相におのおの菩提心あり。つぶさにはかの宗の章疏等の説のごとし。)

三論宗のごときは、八不無得正觀を發するをもつて菩提心となす。法相宗のごときは、唯識中道正理に住するをもつて菩提心となす。

「章疏」等とは、もし三論に依らば、論疏及び諸玄等これなり。もし法相に依らば、述記及び義林等なり。

二に宗家を示す

又有善導^止具如疏述

(また善導の所釈の菩提心あり。つぶさには『疏』(觀經疏)に述ぶるがごとし。)

序分義に云く、

三に「發菩提心」といふは、これ衆生の欣心大に趣く。浅く小因を發すべからず。広く弘心を發すにあらざるよりは、なんぞよく菩提とあひ会することを得んといふことを明かす。(乃至)また「菩提」といふはすなはちこれ仏果の名なり。また「心」といふはすなはちこれ衆生の能求の心なり。ゆゑに發菩提心といふ。(註釈版七祖篇三八六)

[492b] 三に通勸

發菩提心^止之菩提心

(「發菩提心」、その言一なりといへども、おのおのその宗に随ひてその義不同なり。しかればすなはち「菩提心」の一句、広く諸經に亘り、あまねく顯密を該ねたり。意氣博遠にして詮測冲邈なり。願はくはもろもろの行者、一を執して万を遮することなかれ。もろもろの往生を求むる人、おのおのすべからく自宗の菩提心を發すべし。)

「博」は謂く広博。

「遠」は謂く深遠。

横に十方に遍く、豎に三世を貫く。その徳無辺なるが故に。

「詮」は謂く言詮。

「測」は謂く測度。

「冲」は深なり。

「邈」は遠なり。その相深遠にして、思議を表に出す故に。

余文は解すべし。

三に益を結ぶ。

縦雖無余_止往生業也

(たとひ余行なしといへども、菩提心をもつて往生の業となす。)

文意解すべし。

七に深信因果に二。初に標釈、二に結益。初の標釈に四。初に標列、二に略釈(※見当たらない)、三に広釈、四に総釈。今は初。

深信因果_止大小乗經說

(「深信因果」とは、これにつきて二あり。一は世間の因果、二は出世の因果なり。世間の因果は、すなはち六道の因果なり。『正法念經』の説のごとし。出世の因果は、すなはち四聖の因果なり。もろもろの大小乗經の説のごとし。)

文意見るべし。

三に広釈に二。初に標、而に釈。今は初。

若以此因_止諸家不同

(もしこの因果二法をもつてあまねく諸經を撰せば、諸家不同なり。)

文意見るべし。

二に釈

且依天台_止乘因果也

(しばらく天台によらば、いはく『華嚴』は仏・菩薩二種の因果を説き、「阿含」は声聞・縁覺の二乗の因果を説き、方等の諸經は四乗の因果を説く。「般若」の諸經は通・別・円の因果を説き、『法華』は仏因仏果を説き、『涅槃』はまた四乗の因果を説く。)

「謂華」等とは、円は別を兼ねるが故に。
「阿含」等とは、ただ三藏なるが故に。
「方等」等とは、四教並べて対するが故に。
「般若」等とは、円は通別に帯するが故に。
「法華」等とは、純円独妙なるが故に。
「涅槃」等とは、追説追泯なるが故に。

四に総結（※総釈）

[493a] 然則深信_止於一代矣

（しかればすなはち「深信因果」の言、あまねく一代を該ね羅ねたり。）

「該羅」とは、嘉祥云く、「該これ及、羅これ言撰なり。」

二に結益

諸求往生_止為往生業

（もろもろの往生を求むる人、たとひ余行なしといへども、深信因果をもつて往生の業となすべし。）

文意解すべし。

八に読誦大乘に二。初に標列、二に解釈。今は初。

読誦大乘_止種法行也

（「読誦大乘」とは、分ちて二となす。一は読誦、二は大乘なり。「読誦」とは、すなはちこれ五種法師のなか、転読・諷誦の二師を挙げて、受持等の三師を顕す。もし十種法行に約せば、すなはちこれ披読・諷誦の二種の法行を挙げて、書写・供養等の八種法行を顕すなり。）

「五種」等とは、妙句八に法師功德品を釈して云く、

この品の五種法師とは、一に受持、二に誦、三に誦、四に解説、五書写。大論には六種法師を明す。信力故に受、念力故に持。文を見るを誦と為す。忘れずを誦となす。宣伝を説となす。聖人の經書の解し難きを解とすべし。六種法師を釈するに、今經は受持を合して一と為す。解説を合して一と為す。誦誦を開きて二となす。書写を足して五となす。(已上)

(大正三四・一〇八上)

今はすなわち二を挙げて三を撰するものなり。

「十種」等とは、勝天王般若第七(十三丁) 付属品に云く、

仏阿難に告げて言く、「この修多羅を受持するに十種の法あり。何(※原文…何等)を十となす。一は書写、二は供養、三は流伝、四は諦聴、五は自誦、六は憶持、七は広説、八は口誦、九は思惟、十は修行。

(大正八・七二五上)

また弁中辺論下に無上乘品を弁じて云く(世親造、玄奘訳)、

この大乘において十の法行あり。一に書写、二に供養、三に施(※原本…施他)、四に若他誦誦(※原本…若他誦誦)、専心諦聴、五に自披誦(※原本…披誦)、六に受持、七に正しく他のために文義を開演す、八に誦誦、九に思惟、十に[493b]修習等(原本…修習行)。

(大正三一・四七四中)

二に大乘に三。初に名義、二に所指の広を明かす、三に往益を成すを明かす。今は初。

大乘者簡小乘之言也

(「大乘」とは、小乗を簡ぶ言なり。)

文意見るべし。

二に所指の広を明かすに二。初に総明、二に別明。今は初。

別非指一止諸大乘經

(別して一經を指すにあらず。通じて一切の諸大乘經を指す。)

文意見るべし。

二に別明に三。初に結未結を明かす。二に未流布を明かす。三に已流布を明かす。今は初。

而於一代止未結集經

(いはく一切とは、仏意広く一代所説の諸大乘經を指す。しかも一代の所説において、已結集の經あり。未結集の經あり。)

文意見るべし。

二に未流布を明かす。

又於已結止漢地之經

(また已結集の經において、あるいは竜宮に隠れて人間に流布せざる經あり。あるいは天竺(印度)に留まりて、いまだ漢地(中国)に来到せざる經あり。)

文意見るべし。

『探玄記』一(五十八紙)に云く、

第八部類伝訳とは、また十義あり。一に恒本、二に大本、三に上本、四に中本、五に下本、六に略本、七に論釈、八に翻訳、九に支流、十に感応。

初に恒本とは、下の不思議品に云く、一切法界虚空界等の世界、悉く一毛をもって周遍度量し、一一毛の端処、処々中において不可説微塵数の等身、尽未来際劫に常に法輪を転ず。解して云く、これ樹形等の異類世界に通じて毛端処と名く。念々常説し休息あることなし。これ結集すべきにあらず。[494a]その品類多少に限るべからず。また下位をよく

受持する所にあらず。

二に大本とは、下の海雲比丘所の受持したる普賢經のごとし。須弥山の聚筆・四大海の水墨をもって書す。一品の修多羅窮尽すべからず。如是等の品、また塵数を過ぐ。これはこれ諸大菩薩陀羅尼力の受持する所、また貝葉のよく記せられる所にあらず。

三に上本とは、これはこれ結集中の上本なり。西域の相伝には、龍樹菩薩が龍宮に往きて、大不思議解脱經を見る。三本あり。上本は三千大千世界身塵数頌、四天下微塵数品にあり。

四に中品（※原本・本）とは、四十九万八千八百偈、一千二百品にあり。これ上の二本と並んで秘かに龍宮にあり。閻浮提の人力の受持する所にあらず。故にこれ伝わらず。

五に下本とは、十万頌三十八品にあり。龍樹はこの本を將いて出現し天竺に伝う。すなわち論百千を撰し十万となすなり。西域記に説く、于闐国南遮俱槃国の山中にありて、具さにこの本あり。

六に略本とは、すなわちこの土の伝える所の六十卷本、これ十万頌中の前分、三万六千頌の要略を出す所、近くは大慈恩寺の搭上において、梵本華嚴三部あるを見る。略勘ならびにこの漢本と大いに同じ。頌数また相似に等し。今また准じて会す。

（華嚴經探玄記、大正三五・一二二中）

三に已流布を明かす。

而今就翻_止乘之一句

（しかるにいま翻訳将来の經につきてこれを論ぜば、『貞元の入蔵の録』のなかに、『大般若經』六百卷より始めて『法常住經』に終るまで、顕密の大乗經すべて六百三十七部二千八百八十三卷なり。みなすべからく「誦誦大乘」の一句に撰すべし。）

「貞元」等とは、『貞元新釈教目録』三十卷、西明寺沙門円照の撰なり（近來肆刊）。かの録第二十九 [494b]（初）に云く、

大乘入蔵録上、大乘經は六百三十七部三千六百十三卷、二百一十四帙

今、「八百」と作すは恐らくは写誤か。

三に往益を成すを明かすに二。初に正明、二に問答。今は初。

願西方行止寿経意也

(願はくは西方の行者、おのおのその意樂に随ひて、あるいは『法華』を誦してもつて往生の業となし、あるいは『華嚴』を誦してもつて往生の業となし、あるいは『遮那』・『教王』および諸尊の法等を受持し誦してもつて往生の業となし、あるいは「般若」・方等および『涅槃経』等を解説し、書写してもつて往生の業となせ。これすなはち浄土宗の『観無量寿経』の意なり。)

文意見るべし。

二に問答に二。初に密家の難に通ず。二に台家の難に通ず。今は初。

問曰願密止乘一句也

(問ひていはく、願密の旨異なり、なんぞ願のなかに密を撰するや。答へていはく、これは願密の旨を撰せんといふにはあらず。『貞元入藏録』のなかに、同じくこれを編みて大乘経の限りに入る。ゆゑに「誦誦大乘」の一句に撰するなり。)

文意見るべし。

二に台家の難に通ず。

問曰爾前止大乘経也

(問ひていはく、爾前の経のなかになんぞ『法華』を撰するや。答へていはく、いまいふところの「撰」とは、権・実・偏・円等の義を論ずるにはあらず。「誦誦大乘」の言、あまねく前後の大乘諸経に通ず。前とは『観経』以前の諸大乘経これなり。後とは王宮以後の諸大乘経これなり。ただ大乘と

いひて権実を選ぶことなし。しかればすなはちまさしく『華嚴』・方等・「般若」・『法華』・『涅槃』等の諸大乘經に当れり。）

文意見るべし。

九に行者を勧進す。

勸進行者^止三昧等也

（「勸進行者」とは、いはく定散諸善および念仏三昧等を勧進するなり。）

文意見るべし。

二に九品に二。初に標、二に釈。今は初。

次九品者^止為九品業

（次に九品とは、前の三福を開して九品の業となす。）

正因正業は上の已釈のごとし。

二に釈に九。初に上上品（乃至）九に下下品。今は初。

謂上品上^止句之意也

（いはく上品上生のなかに「慈心不殺」といふは、すなはち上の世福のなかの第三の句に当る。次に「具諸戒行」とは、すなはち上の戒福のなかの第二の句の「具足衆戒」に当る。次に「誦誦大乘」とは、すなはち上の行福のなかの第三の句の「誦誦大乘」に当る。次に「修行六念」とは、すなはち上の第三の福のなかの第三の句の意なり。）

「慈心」等の三は、当文に的当す。故に「即当」と云う。

「修行六念」の文は的当せず。故に「意」と云うなり。

[495a] 二に上中品

上品中生^止第三意也

(上品中生のなかに「善解義趣」等といふは、すなはちこれ上の第三福のなかの第二・第三の意なり。)

文意見るべし。

三に上下品

上品下生^止第二意也

(上品下生のなかに「深信因果発道心」等といふは、すなはちこれ上の第三の福の第一・第二の意なり。)

文意見るべし。

四に中上品

中品上生^止二句意也

(中品上生のなかに「受持五戒」等といふは、すなはち上の第二の福のなかの第二の句の意なり。)

文意解すべし。

五に中中品

中品中生^止福之意也

(中品中生のなかに「或一日一夜受持八戒齋」等といふは、また同じく上の第二の福の意なり。)

文意解すべし。

六に中下品

中品下生^止二句意也

(中品下生のなかに「孝養父母行世仁慈」等といふは、すなはち上の初めの福の第一・第二の句の意なり。)

文意解すべし。

七に下上品

下品上生^止罪滅得生

(下品上生は、これ十悪の罪人なり。臨終の一念に罪滅して生ずることを得。)

以下三品、三福無分。造罪の軽重をもつて差別を弁ず。今すなわち軽罪。

八に下中品

下品中生^止罪滅得生

(下品中生は、これ破戒の罪人なり。臨終に仏の依正の功德を聞きて、罪滅して生ずることを得。)

問う。疏に云く、「罪人すでに弥陀の名号を聞きて」(七祖篇四九二)と。今何ぞ「仏の依正功德を聞きて」と云うや。

答う。疏は能具を約して故に名号と云う。経は所具に約す。故に功德と云う。文に云く「ために阿弥陀仏の十力威徳を説き」(註釈版一一四)等と。今また[496b]これに依る。例えば願は「称我名者」と云い、成就文は「みなどにも無量寿仏の威神功德の不可思議なるを讚歎したまふ」(註釈版四一)等と云うがごとし。能所不二、また何ぞこれを怪しむ。これすなわち次の罪。

九に下下品

下品下生^止罪滅得生

(下品下生は、これ五逆の罪人なり。臨終の十念に罪滅して生ずることを得。)

これすなわち重罪。下上の「一念」、下中の「聞已」、下下の「十念」、ただこれ縁の別にして、この異なるのみ。理実互顯にして、願に「十念」と云い、經に「一念」と云い、並んで「乃至」の言を置くが故なり。

此之三品止大乘意也

(この三品は、尋常の時ただ悪業を造りて往生を求めずといへども、臨終の時はじめて善知識に遇ひてすなはち往生を得。もし上の三福に准ぜば、第三福の大乘の意なり。)(※省略)

三に結文

定善散善止之益是也

(定善・散善大概かくのごとし。文(散善義)に、すなはち「上よりこのかた定散両門の益を説くといへども」といふこれなり。)

上来の所釈、所廢の行、これ上来の雖説の大意を広めるものなり。次下の所立、これ望仏の本願の文意を広めるものなり。

二に念仏に二。初に正しくその体を指す。二に付属の意を明かす。今は初。

次念仏者止仏義如常

(次に念仏とは、もつばら弥陀仏の名を称するこれなり。念仏の義常のごとし。)

文意見るべし。

二に付属の意を明かすに四。初に正しくその意を明かす。二に諸行を付属せざる意を明かす。三に而説諸行の意を明かす。四に遐代に流通するを明かす。今は初。

而今言正止通遐代也

(しかるにいま、「正明付属弥陀名号流通於遐代」(同)といふは、おほよそのの『経』(観経)のなかに、すでに広く定散の諸行を説くといへども、すなはち定散をもつて阿難に付属し後世に流通せしめず。ただ念仏三昧の一行をもつてすなはち阿難に付属し遐代に流通せしむ。)

文意見るべし。

二に諸行を付属せざる意を明かすに二。初に難、二に通。初の難に二。初は総難、二に別難。今は初。

[496a] 問曰何故止属流通乎

(問ひていはく、なんのゆゑぞ定散の諸行をもつて付属流通せざるや。)

文意見るべし。

二に別難に二。初に浅深の相望に約す。二に念観の相望に約す。初の浅深の相望に約すに二。初に散をもつて難ず、二に定をもつて難ず。今は初。

若夫依業止付属深業

(もしそれ業の浅深によりて嫌ひて付属せずは、三福業のなかに浅あり深あり。その浅業は孝養父母・奉事師長なり。その深業は具足衆戒・発菩提心・深信因果・読誦大乘なり。すべからく浅業を捨てて、深業を付属すべし。)

文意見るべし。

二に定をもつて難ず

若依観浅止付属深観

(もし観の浅深によりて嫌ひて付属せずは、十三観のなかに浅あり深あり。その浅観といふは日想・水想これなり。その深観といふは、地観より始めて

雑想に終るまで、すべて十一観これなり。すべからく浅観を捨てて、深観を付属すべし。）

文意解すべし。

二に念観の相望

就中第九^止仏三昧哉

（就中第九観は、これ阿弥陀仏観なり。すなはちこれ観仏三昧なり。すべからく十二観を捨てて、観仏三昧を付属すべし。就中同疏の「玄義分」のなかには、「この経は観仏三昧を宗となし、または念仏三昧を宗となす」と。すでに二行をもつて一経の宗となす。なんぞ観仏三昧を廃して念仏三昧を付属するや。）

文意解すべし。

二に通に三。初に疏文を挙げて釈す。二に文意に反顕す。三に正しく文意を顕す。今は初。

答曰云望^止弥陀仏名

（答へていはく、「仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり」（散善義）といふ。）

文意見るべし。

二に文意に反顕すに二。初に総明、二に別相。今は初。

定散諸行^止不付属之

（定散の諸行は本願にあらず。ゆゑにこれを付属せず。）

総じて浅深の相望の難に答えるなり。

二に明（※別）相。

亦於其中_止以付属之

（またそのなかにおいて、観仏三昧は殊勝の行といへども、仏の本願にあらず。ゆゑに付属せず。念仏三昧はこれ仏の本願なるがゆゑに、もつてこれを付属す。）

別して念観の相望の難に答えるなり。

三に正しく文意を顕すに三。初に本願を釈す。二に一向を釈す。三に上釈を指す。

[496b]言望仏本_止具如前弁

（「仏の本願に望む」といふは、『双卷経』（大経）の四十八願のなかの第十八の願を指す。「一向専称」といふは、同経の三輩のなかの「一向専念」を指す。本願の義、つぶさに前に弁ずるがごとし。）

科を配して見るべし。

三に而説諸行の意を明かすに二。初に問、二に答。今は初。

問曰若爾_止散諸善乎

（問ひていはく、もししからば、なんがゆゑぞただちに本願の念仏の行を説かず、煩はしく本願にあらざる定散諸善を説くや。）

文意見るべし。

二に答に二。初に優劣を比較する。二に廃立義を彰す。初に優劣を比較するに二。初に本願は大本に譲る。二に定散の説は劣を顕す。今は初。

答曰本願_止重不説耳

（答へていはく、本願念仏の行は、『双卷経』（大経）のなかに委しくすで

にこれを説く。ゆゑにかさねて説かざるのみ。）

文意見るべし。

二に定散の説は劣を顕すに二。初は正示、二に引例

又説定散止法華第一

（また定散を説くことは、念仏の余善に超過したることを顕さんがためなり。もし定散なくは、なんぞ念仏のことに秀でたることを顕さんや。例するに『法華』の三説の上に秀でたるがごとし。もし三説なくは、なんぞ『法華』第一を顕さん。）

科を配して解すべし。

二に廢立義を彰すに三。初に総じて廢立を標す。二に廢立の相を解す。

三に廢立義を結ぶ。今は初。

故今定散止為立而説

（ゆゑにいま定散は廢せんがために説き、念仏三昧は立せんがために説く。）

文意解すべし。

二に廢立の相を解すに二。初に經の所説に約す。二に宗家の意に約す。

初に經の所説に約すに二。初に上を承けて下を起こす。二に正しく二善を積す。今は初。

但定散止用難測

（ただし定散の諸善みなもつて測りがたし。）

文意見るべし。

二に正しく二善を積すに二。初に定善、二に散善。初の定善に四。初に

総じて定善の益を明かす。二に別して真観の徳を彰す。三に勝れどもなお付かざるを明かす。四に世人の迷執を誡める。今は初。

[497a] 凡定善者^止修行定観

(おほよそ定善とは、それ依正の観、鏡を懸けて照臨す。往生の願、掌を指して速疾なり。あるいは一観の力、よく多劫の罪愆を祛く。あるいは具憶の功、つひに三昧の勝利を得。しかればすなはち往生を求むる人、よろしく定観を修行すべし。)

文意見るべし。

二に真観の徳を彰す

就中第九^止最甚深也

(就中第九の真身観は、これ観仏三昧の法なり。行もし成就せば、すなはち弥陀の身を見たてまつる。弥陀を見てまつるがゆゑに、諸仏を見たてまつることを得。諸仏を見たてまつるがゆゑに、現前に記を授けらる。この観の利益もつとも甚深なり。)

文意見るべし。

三に勝れどもなお付かざるを明かす。

然今至観^止属之行也

(しかるをいま『観経』の流通分に至りて、釈迦如来、阿難に告命して往生の要法を付属流通せしむるちなみに、観仏の法を嫌ひてなほ阿難に付属せず、念仏の法を選びてすなはちもつて阿難に付属したまふ。観仏三昧の法、なほもつて付属したまはず。いかにいはんや日想・水想等の観においてをや。しかればすなはち十三定観は、みなもつて付属せざるところの行なり。)

文意解すべし。

四に世人の迷執を誡める。

然世人若_止者宜商量

(しかるに世の人、もし観仏等を楽しみて念仏を修せざるは、これ遠く弥陀の本願を乖くのみにもあらず、またこれ近くは釈尊の付属に違ふ。行者よろしく商量すべし。)

文意解すべし。

二に散善に三。初に四種の行を列す。二に世人の迷執を示す。三に世人の迷執を解す。今は初。

次散善中止諸神呪

(次に散善のなかに、大小持戒の行あり。世みなおもへらく、持戒の行者はこれ真要に入るなり。破戒のものは往生すべからずと。また菩提心の行あり。人みなおもへらく、菩提心はこれ浄土の綱要なり。もし菩提心なくは、すなはち往生すべからずと。また解第一義の行あり。これはこれ理観なり。人またおもへらく、理はこれ仏の源なり。理を離れて仏土を求むべからず。もし理観なくは、往生すべからずと。また読誦大乘の行あり。人みなおもへらく、大乘経を讀誦してすなはち往生すべし。もし読誦の行なくは、往生すべからずと。これにつきて二あり。一には持経、二には持呪なり。持経とは、「般若」・『法華』等の諸大乘経を持するなり。持呪とは随求・尊勝・光明・阿弥陀等のもろもろの神呪を持するなり。)

応のごとく領会す。

二に世人の迷執を示す。

凡散善十_止殆抑念仏

(おほよそ散善の十一人、みな貴ぶといへども、そのなかにおいてこの四箇の行は、当世の人ことに欲するところの行なり。これらの行をもつてほとほと念仏を抑ふ。)

文意見るべし。

三に世人の迷執を解す。

倩尋經意止願之故也

（つらつら經の意を尋ねれば、この諸行をもつて付属流通せず。ただ念仏の一行をもつて、すなはち後世に付属流通せしむ。知るべし、釈尊の諸行を付属したまはざる所以は、すなはちこれ弥陀の本願にあらざるゆゑなり。また念仏を付属する所以は、すなはちこれ弥陀の本願のゆゑなり。）

文意見るべし。

二に宗家の意に約す。初に正しく宗意を示す。二に兼ねて得失を彰す。今は初。

今又善導止願之行也

（いままた善導和尚、諸行を廃して念仏に帰する所以は、すなはち弥陀の本願たる上、またこれ釈尊の付属の行なり。）

文意解すべし。

二に兼ねて得失を彰す。

[497b] 故知諸行止豈唐捐哉

（ゆゑに知りぬ、諸行は機にあらず時を失す。念仏往生は機に当り、時を得たり。感応あに唐捐せんや。）

機に堪不あり。時に応不あり。得失歴然なり。觸目知るべし。

三に廢立の義を結ぶ。

当知随他_止行者_止知

(まさを知るべし、随他の前にはしばらく定散の門を開くといへども、随自の後には還りて定散の門を閉づ。一たび開きて以後永く閉ぢざるは、ただこれ念仏の一門なり。弥陀の本願、釈尊の付属、意これにあり。行者知るべし。)

「随自」「随他」とは、涅槃の三十五(南本三十二)の迦葉品に云く、

善男子、我の謂う所の十二部経のごときは、あるいは随自意説、あるいは随自随他意説なり。

また止観三の一(四十八紙)、また妙玄一の一に云く、

種々に建立し衆生を施設するといえども、ただ随他意の語にしてい、仏の本懐にあらず。

今また准じて解す。

四に遐代に流通するを釈す

亦此中遐_止歳之時焉

(またこのなかに「遐代」とは、『双卷経』(大経)の意によらば、遠く末法万年の後の百歳の時を指す。これすなはち遐きを挙げて邇きを撰するなり。しかれば、法滅の後なほもつてしかなり。いかにいはんや末法をや。末法すでにしかり。いかにいはんや正法・像法をや。ゆゑに知りぬ、念仏往生の道は正像末の三時、および法滅百歳の時に通ず。)

文意見るべし。

- ・ 言葉の補足説明は、(※〜)
- ・ 言葉の補筆は、「※〜」
- ・ 引文に省略がある場合は、(※省略…)

- ・ 引文が原本と異なる場合、（※原本…）
- ・ 省略記号
- 真聖全…真宗聖教全書
- 註釈版…浄土真宗聖典註釈版
- 浄真全…浄土真宗全書
- 大正…大正新脩大藏経

【科段⑧（随文釈）】

十二に付属章

標章

引文

経

疏文

私釈

標列

解釈

定散

標列

解釈

定善

十三観

その益相を明かす

散善

標列

解釈

三福

経文を挙ぐ

文に随いて解す

孝養父母等

正釈

孝養父母

標列

慈(悲)心不殺等 結益
 標列 奉事師長 解釋
 解釋 開に約す
 四無量 結益
 十善業 合に約す
 正積 結益
 受持三歸 標列
 具足衆戒 標列
 不犯威儀 標列
 發菩提心 正積
 諸家を挙ぐ
 総じて不同を標す
 別して五家を列す
 天台 眞言 華嚴 三論法相

上下品
中上品
中中品
中下品
下上品
下中品
下下品

結文

念仏

正しくその体を指す
付属の意を明かす

正しくその意を明かす
諸行に付属せざる意を明かす

難

総難
別難

浅深の相望に約す

散をもつて難とす
定をもつて難とす

念観の相望に約す

通

疏文を挙げて積す
文意を反顕す

総明
別相

正しく文意を顕す
本願を積す

一向を積す
上積を指す

而説諸行の意を明かす

問 答

優劣を比較す

本願は大本に譲る
定散はの説は劣を顕す

正示

引例

廃立の義を彰す

総じて廃立を標す

廃立の相を解す

経の所説に約す

上を挙げて下を起こす

正しく二善を積す

定善

総じて定善の益を明かす

別して真観の徳を彰す

勝れども猶の付かざるを明かす

世人の迷執を誠める

散善

四種の行を列す

宗家の意に約す

正しく宗意を示す

兼ねて得失を彰す

廃立の義を結す

遐代に流通するを明かす